

**「グリーンな栽培体系への転換サポート事業」に係る
グリーンな栽培マニュアル【犬山地区・水稲移植栽培】**

時 期	作 業	J Aこよみ資材等	備 考
11 月上～ 下旬	耕起①(秋耕)	ワラクサール EX 石灰窒素	<u>稲株・稲わらの腐熟促進のため、温 度が高い秋期にすき込みを行う 腐熟促進のため資材の併用を推奨</u>
冬期～ 春期	土改材散布 耕起②	農力アップ、ようりん	
5 月	育苗		
6 月上～ 中旬	代かき 施肥 田植え 一発除草剤	ひとまきくん 箱施薬 (アンコール剤等) エンペラー剤・ウルティモ剤	
7 月中～ 下旬	中干し	けい酸加里プレミア 34	有効茎数を 1 株あたり 20 本確保し てから開始する。 <u>ゆめまつりは 3 日※、あいちのかお りは 7 日を限度に延長する。ただ し、田面に軽くひびが入る程度を目 安とする。</u>
8 月下旬	出穂 (ゆめまつり)		※出穂の早いゆめまつりは、幼穂形成期の乾燥の影 響を避けるため、中干しの延長を短くする
9 月上旬	出穂 (あいちのかおり)		
8 月中～ 9 月中旬	斑点米カメム シ類防除	キラップ粒剤、スターク ル豆つぶ剤	散布時期の目安は キラップ粒剤は出穂前 10 日頃 スタークル剤は出穂後 7～10 日 液剤の方が防除効果が安定してお り、担い手への委託による液剤散布 (ドローン使用) を推奨
10 月中旬	収穫		

※ 直播栽培もこれに準ずる (育苗～田植えに関わる作業を除く)

参考

1 水田からのメタン発生抑制について

- 地球温暖化防止のための温室効果ガス排出削減の取組が求められている
- 日本では、水田からの発生量が最も多い。湛水（低酸素）状態の水田土壌で、嫌気性菌のメタン生成菌の働きにより発生する。
- 水稻の栽培期間中に、①土壌中への酸素の供給量を増やす、②土壌中の有機物の分解量を減らす、ことで水田からのメタンの発生量を削減できる。

◆水田からのメタン発生削減に資する栽培技術

①中干し期間延長

- 中干し期間を延長することにより、水稻栽培期間の土中への酸素供給量が増えるため、メタン発生量を削減できる。
- 慣行の1週間延長により約3割削減

②秋耕

- 前作の稲株・稲わらを秋季にすき込み腐熟を進めることで、水稻栽培期間中の有機物の分解量を減少させ、メタン発生量を削減できる。
- 春にすき込む場合と比べ約5割削減

※参考資料：農林水産省資料「グリーンな栽培体系への転換サポート活用イメージ」

2 水稻作におけるドローンを用いた省力的な作業

- 農業用ドローンを用いた作業は、地上作業（乗用管理機等）に比べ、高速で飛行できることから作業能率が高い。（令和4年度の実証では、作業時間を約7割削減）
- 積載量が少ないことから、農薬撒布作業（殺虫・殺菌剤は、薬液量10aあたり0.8L）での利用が一般的である。他に、播種、追肥、除草剤散布等に利用できる。
- 防除作業の場合、地上防除（10aあたり100L程度）に比べ散布薬液量が少ないため、薬液調製にかかる時間も大幅に削減される。